大学における授業展開の事例研究

―「西洋史学概説」の講義から―

中　谷　功　治

1．はじめに

2007年度、春学期の「西洋史学概説」を担当するに際し、主に留意したのは次の３点である。

（１）多人数授業が想定されること。本授業は、高校地歴科および中学校社会科の教員免許状取得のための選択必修単位であり、毎年１年生を中心に、文学部だけでなく他の文系学部から多くの学生が受講する。例えば､2006年度の｢西洋史学概説」では、春学期に約300名、秋学期に約500名の受講者があった。

（２）一方的な講義とならない授業を工夫すること。上記のような条件下では、一斉の講義形式での授業が不可避だといえるが、むしろそれゆえに対策を考える必要がある。

（３）大学の授業としての質の確保。本授業には、高校世界史Ｂを履修した受講生だけでなく、教科未履修者あるいは大学受験の際に未選択のため高校での授業内容の大半を忘れている者が相当数いることが予想される。西洋史学について、古代ならびに中世を中心に興味深い話題を提供し、愉快な授業を心がけたくもあるが、その一方で、教員免許状に向けた授業でもあり、重要な歴史的事実についての知識の獲得と、歴史的な考え方の習得を重視しなければならない[(1)]。

（４）私語への対応について。大学の授業において、「多人数（大教室）」かつ「複数学部にわたる」「講義形式」の授業では、私語が横行するケースが多い。本授業は一日の最終時間である５限目での開講が予定されており（しかも教室は収容数 500名の大教室）、何らかの対応を考える必要がある。

以上の課題に対応するため、以下の３つの方針を定めた。

Ａ：教科書を指定し、これをもとに授業を進める。試験も教科書の範囲を逸脱しないこととし、授業中に何度かアナウンスした。用いた教科書は『大学で学ぶ西洋史［古代・中世篇］』[(2)]である。なお、近現代史については、秋学期に開講される西洋史学概説で扱うことになっている。

Ｂ：双方向的な授業実践の試み[(3)]として、受講生には次回分の教科書の内容をあらかじめ読み、先の授業において疑問点・不明点を指摘してもらい、これらに答える形での授業を主軸に進めることにした。授業者自身も受講生たちと同様に毎週教科書を通読し、授業者なりの「まとめ」をプリントで配布した。

Ｃ：私語については、最初の授業でプリント「私語についての覚え書き」を配布し、受講生に注意を喚起した。授業中の目にあまる私語、そして周囲への迷惑な態度が明らかな場合には、断固として注意をする旨申し述べ、実践した。私語については、授業評価でも別途コメントを求めた。これについては、第６章で詳しく述べることにする。

2．授業計画と実践

授業のシラバスは次のとおりである。

１）講義題目：西洋史学概説
２）副題：西洋の古代と中世の歴史
３）講義目的：西洋の古代・中世史について論じる。欧米を中心とした近現代の西洋世界が形成される以前の、その元になった世界について毎週、話題を決めて考察する。教科書を指定し、それにできるだけ準拠しつつ、なるべく多くの時代とテーマについて幅広く考察していきたい。
４）各回ごとの授業内容：初回にイントロダクションとして授業方針について詳しく述べる。必ず出席してほしい。万一欠席した場合には、初回の情報を必ず入手して授業に臨むこと。授業は以下の

順序で進める予定である。

（1）イントロダクション：西洋史学の射程
実際の授業日（4月9日）

（2）総説：西洋古代史と中世史から学ぶもの
（4月16日）

（3）ギリシア・ポリス世界の誕生と発展
第1章1節　（4月23日）

（4）ギリシア・ポリス世界の繁栄
第1章2節　（5月7日）

（5）ヘレニズム時代の諸相
第1章4節　（5月14日）

（6）共和政ローマの発展と変容
第2章1節　（5月21日）

（7）元首政期ローマ帝国の繁栄
第2章2節　2回休校（5月28日）

（8）キリスト教の発展と古代末期の世界
第2章5節　（6月18日）

（9）カロリング帝国とローマ・カトリック世界
第3章2節　（6月25日）

(10) キリスト教世界の成熟
第4章2節　（7月2日）

(11) 東欧諸国の発展
第4章5節　（7月9日）

(12) ヨーロッパ外部世界とのつながり
第4章7節　はしかで実施できず

(13) 西欧諸国の発展
第5章2節　はしかで実施できず

5）教科書：服部良久・南川高志・山辺規子編著『大学で学ぶ西洋史［古代・中世］』（ミネルヴァ書房、2006年8月刊）2,800円

6）授業方法：講義形式。ただし、授業参加者の積極的な予習を前提として授業を進める。該当する授業の前の週の時間に、あらかじめ教科書における疑問点などを提示してもらい、それに応じて当該の授業内容を決定する。教科書の内容をすべて解説するとはかぎらない。なお、この授業冒頭での時間より遅れての遅刻入室は原則として認めない。

7）参考文献：授業中に適宜紹介するが、必要に応じて高校の世界史の教科書を参照する必要がある場合が考えられる。

8）成績評価方法・基準：定期試験を実施する（80％）。出席そのものは重視しないが、建設的な質問や考察などの提示もあわせて評価する（20％）。

9）学生による授業評価の方法：授業中実施

10）準備学習についての具体的な指示および他の科目との関連：高校で世界史を学んでいない者は、予め古代オリエントから中世ヨーロッパまでの大まかな歴史の流れを確認しておくことが必要である。

11）キーワード：古代地中海世界、ギリシア、ヘレニズム、ローマ帝国、ヨーロッパ中世

本授業の受講登録者は278名であった。出席はとっていないので、出席者数は不明であるが、配布プリントの残部数から推測して、毎回の出席者は200名前後であった。プリントはＡ３用紙で２～３枚をホッチキスで止め、質問用紙とともに授業開始前に教室入り口に置いておいた。なお、毎回プリントのみを受け取り、授業には出席しない受講生も10～20名程度いた模様である。

第１回授業では、シラバスの内容をあらためて説明し（プリント配布）、さらに前提として「西洋史学の扱う範囲とは：西洋史学の射程」について述べた。すなわち、西洋史学の扱う範囲とは、（１）広い意味での地理的なヨーロッパの歴史、（２）その前史＝ヨーロッパ史の成立に深くかかわった世界の歴史、（３）（ヨーロッパの周辺地域を含む）ヨーロッパに強く影響を受けた地域の歴史、の概ね３つからなることを解説した。

教科書の購入や授業に向けての予習時間を確保するため、第２回授業では教科書の中味には入らず、総説として（１）「ヨーロッパや西洋史学を学ぶ意義について」、（２）ヨーロッパ形成の三要素：ゲルマン諸族・古代ローマ文明・カトリック教会について、（３）西洋史の時代区分の概要、（４）古代地中海世界史について、（５）ヨーロッパ中世へのまなざし、について簡潔に述べた。

配布プリント（参照として、第４回のものを末尾に掲載）については、教科書の関連箇所のまとめ、追加の地図や図示などの他に、授業で取り上げることができなかった箇所のまとめや参考図書の追加の内容を配布した。なお、毎回の授業で扱う教科書１節分は、Ｂ５で約12～14ページ程度である。

前の週に提出された質問への回答については、本授業の根幹でもあるので、できるだけ多くの質問事項を取り上げるべきと考えた。一方で、配布プリントのみを持ち帰り、出席しない受講生への対応として、プリントには質問事項のみを

記載し、回答は授業中に口頭で述べるようにした。

以上の結果、質問への回答時間は毎回30分以上を要することになり、「長すぎる」との批判的なコメントを多数受けた。このようなコメントの主な理由は、毎回質問を提出する者の数が限定されているためであると考えられる。本授業では、質問とそれへの回答を主軸にするつもりであったが、実際に質問を寄せる受講生は毎回50名前後であり、出席者全体の４分の１にすぎなかった。授業への積極的な参加ではなく、毎回の講義に通常の受講態度で臨む者が多数を占めたのである。結局、対策として質問への回答時間があまり長くならないよう心がけた。

さらに、授業への質問・感想の中には、「高校世界史の単位が未履修である」ことへの配慮を求める要望が散見された[(4)]。

一方、試験に向けての勉強の仕方についてもアドバイスを求められた。自らの経験を踏まえて、教科書を熟読し、自分なりにノートに要点を整理して記載することを薦めた。それゆえ、授業者が作成するプリントについては、教科書を読む必要がなくなるほどの「至れり尽くせり」な「まとめ」となることを避けるよう気をつけ、授業での解説を加味することで理解が得られるような内容を目指した。

また、はしかの流行により、大学は６月４日から16日まで休講となり、２回の授業が実施できなくなった。補講などによる対応が考えられたが、受講生からの希望を聴取したところ、補講希望者は若干名に留まったため、授業は順送りで進め、予定された最後２回は今回は実施しないことにした。

３．授業評価の実施

授業最終日に授業評価を実施した。使用したのは、授業中に直接記述してもらう形式の＜授業に関する調査＞である（Ａ５用紙）。はしかによる休講のため、授業時間が限定されていたことも考慮し、客観的な指標での評価[(5)]よりも、短時間でのより率直で自由な記述を重視した。

回答数は 108名で、授業出席者の約半数であった。これは、通常のプリント配布と同時に授業評価用紙を配布したため、出席者がいつもの質問用紙と同じような対応をしたためと思われる。

記入事項は、学部・学年・性別と①「授業での評価できる点」、②「授業の問題点」、③「その他（自由記述）」の３項目である。「特にない場合は空欄でよい」、「私語については③のところでぜひコメントしてほしい」と伝えて書いてもらい、授業終了時に回収した。以下に、その概要を紹介する。

①授業で評価できる点（学年未明示者はすべて１年生）人数

１：質問コーナーの設置とそれへの回答　19
２：プリントわかりやすい、まとまっている　18
３：プリントの図説を評価　5
４：プリントに沿って授業が展開されたこと　1
５：深く（詳しく）学べてよかった　21
６：ローマ史（中世史）を学べた　2
７：視野が広がる　2
８：説明がわかりやすい　1
９：高校の世界史とはまったく違った視点で歴史を見ることができた　2
10：高校とは違う新しい「世界史」に触れられた　1
11：教科書が定められていること　2
12：教科書がいい　2
13：勉強したい者はやる、やる気のない者はやらない、という自由な方針　1
14：出席が自由であること　1
15：世界史へのモチベーションがとても上がった　1（２年）
16：勉強せざるをえない状況を作ってくれたこと　2（４年）
17：世界史の復習ができた　4（４年）
18：このような大教室で静かな授業は珍しい　2
19：教室の雰囲気はよい　2
20：雑学的なことも学べた　3
21：話題がよく退屈しなかった　1
22：たとえ話はわかりやすかった　1
23：おもしろかった　1
24：授業中に１分間休憩があったこと　1
（注記：本授業では、テーマの切れ目に約１分間の休憩を設置した）

②：授業の問題点

25：質問への回答時間が長い　8
26：回答は厳選すべき、読めばわかる質問に答えすぎ　4
27：質問など不要である　3

28：質問への回答の仕方が高圧的だ　2
29：回答で「わからない」という答え方が気になる、省略してはどうか　2
30：質問はしているが、やはり一方的な講義形式である　1
31：プリントにもっと工夫の余地あり　2
32：プリントが見づらい　2
33：教科書をもっと活用すべし　4
34：基本的な事項をもっと丁寧に説明せよ　4
35：もっとじっくりと解説してほしい　2
36：進むのが早すぎる　2
37：内容が多すぎる　1（２年）
38：流れがつかみにくい　1
39：試験範囲が広すぎる　2
40：教科書が難しい　3
41：難しい　6
42：最初の方の授業は難易度が高かった（中世史はわかりやすかった）　1
43：予習をしていても授業についていくのは大変だった　1
44：説明がわかりにくい　1
45：もっとわかりやすく、楽しい授業を　1
46：教職で受講しているので、本当に大切なことをわかりやすく　1
47：高校で世界史をやっていない学生にも配慮した授業を　6
48：評価に出席点も加味すべき（注記：平常点は加味している）　2
49：補講がなかったこと（注記：希望した者は５名以下だった）　1
50：授業にメリハリを　4
51：ポイントがぼやけている　3
52：重要語句・人物を強調せよ　1
53：力の入れる所と入れない所の差が激しい（注記：50,51,52と矛盾）　1
54：ストーリー的な話し方を少しはしてほしい　1
55：多少は板書をすべき　5
56：声が小さい、聞き取りにくい　3
57：熱意を感じない　2
58：こぼれ話も聞きたい（注記：20とは矛盾する）　2
59：話がねちっこい　1
60：話し方が単調だ　1
61：授業期間が短かすぎる　1
62：時間配分にも気をつけてほしい　1
（注記：終了が午後６時20分の最終授業なので、時間内に終了することに気をつけたが、一部最後を急ぐこともあった）
63：受講生が多すぎる　1
64：授業全体の空気が気になる　1
65：なんのためにこの授業を取っているのか、いまいちわからない　1
66：この程度の授業なら自分の方が上手にできる　1

４．試験の実施

試験日は７月23日（月）で、一切の持ち込みを認めず、解答時間１時間で実施した。出題は高校世界史Ｂのレベルを考慮した、①正誤問題などの正解を選択する問題を10題（各５点；基本的に授業で指定した教科書でも言及されている内容）、②３行程度での字句説明（これは６題から３つを選択。①と同じく高校世界史Ｂに登場することの多い、かなり有名な事項で、授業でも詳しく説明した）（各10点）、③教科書本文に登場する一節を引用し、これを読んで適切な題目（１行程度）を付ける問題を４題（各５点）であった。以上合計で100点となる。（試験問題については、本稿の末尾に掲載する）

試験には、受講登録者278名の内、228名が臨んだ。これは毎回の出席者200名前後とプリントのみを受け取っていた者の合計数に概ね重なるものである。

試験監督をしていて気がついたのは、じっくりと考えたり、長く記述する必要のない問題が大半であるとはいえ、退出が許可される試験開始30分を経過するなり、相当数の受験者が早々に退席したことである。③の読み取り問題を読み返したり、②の３行記述を何度も推敲するような態度は、むしろ例外的であったといえる。要するに、諦めが早い。教職にかかわる単位の割には合格に向けての執着度はあまり強くはなかったという印象を受けた。

５．成績の分析

問１～10については、４・６・８を除き部分点はない。正答率は以下のとおりで、10問での平均は49.265点、100点換算の素点としては24.63点

（満点50点）である。

（正答率）	%
問１：巨大ポリスとしてのアテネ	53.51
問２：スパルタとデロス同盟	74.56
問３：ヘレニズム都市	42.11
問４：共和政ローマの出来事	34.39
問５：帝政ローマの出来事	56.84
問６：キリスト教迫害の歴史	39.91
問７：レヒフェルトの戦い	55.88
問８：グレゴリウス改革	31.33
問９：英仏百年戦争の勃発の時期	39.21
問10：ロシアのキリスト教改宗	64.91

問11は６題の内３つを選択させたが、その選択者数（220人中）と平均得点（10点中）は次のとおりである。

Ａ：ローマ元首政：　101人、5.24点
Ｂ：ピレンヌ・テーゼ：16人、 6.5点
Ｃ：暗黒時代：　92人、7.59点
Ｄ：ディアドコイ：　81人、 7.9点
Ｅ：ピピンの寄進：　104人、6.47点
Ｆ：カノッサの屈辱：135人、7.18点

問12の４題の各得点平均（５点中）は次のとおりである。

α：紀元前４世紀のギリシア・ポリスの盛衰 2.33
β：共和政期ローマの元老院議員の構成　2.78
γ：古代末期における修道士の役割　2.96
δ：中世におけるカトリック教会の役割　2.05

試験全体の平均点は49.22であった。なお、シラバスに明示してあるようにここに平常点を加味し、実質的に50点を獲得した者は60点で合格とした（平常点を加味した調整後の平均は55.52である）。結果として、受験者全体の50％近くが不合格（合格者は118名）となった。

全体の得点分布は図１のとおり。ここからわかることは、得点は正規分布とはなっておらず、おおよその傾向として、25点から75点までの間において、まんべんなく分布している。

授業評価でのコメントをも加味しつつ、実質的な受講者（実際に試験を受けた228名）について推測するならば、半数以上の者は高校の世界史の授業の未履修者であるか、履修してもその内容の大半が知識としてほとんど定着しておらず、さらに本授業をもってしても十分なレベルに達することができなかったものと思われる。

授業および教科書が難解であったというコメントも見られる。率直に言って、半数近くを占める不合格者については、高校世界史Ｂレベルの補習的な授業こそ必要であったといえるかもしれない（例えば、毎回小テストを課して基本知識の定着を図るなど）。

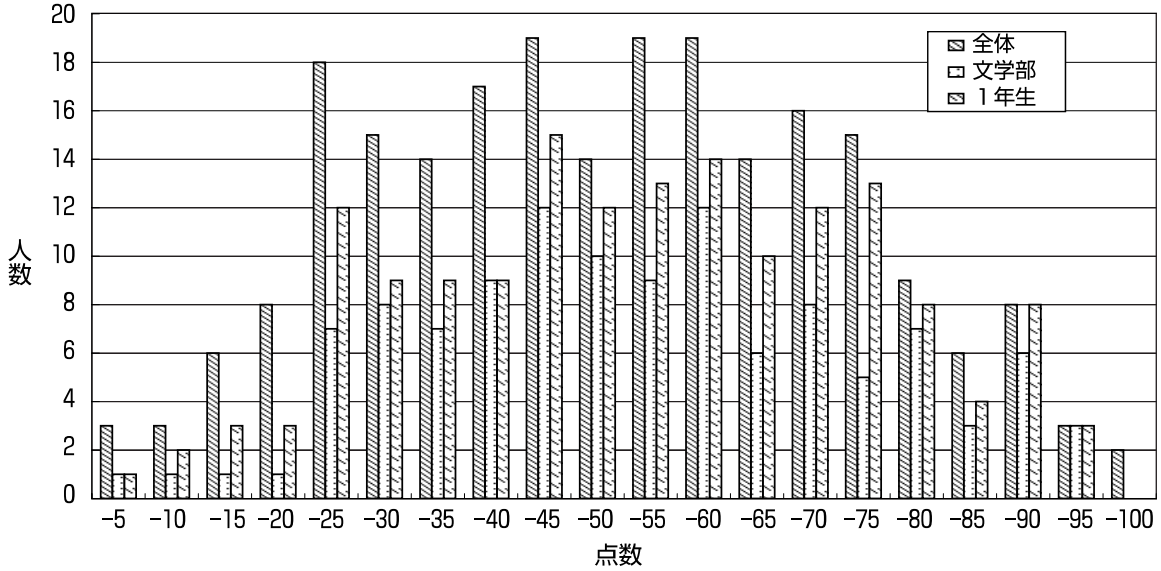


図１　西洋史学概説　得点分布

一方で、高校世界史を強く意識した試験問題であったため、例えば問１～10が全問正解という受講生も数名存在した。85点を超える点数を獲得した者にとっては、「楽勝」とも言っていいような試験であったと考えられる。

６．私語について

私語への対策として、授業の最初で配布した「個人的見解」（Ａ４用紙１枚）は次のようなものである。

【私語についての個人的見解】

●基本方針

授業中における私語について、これを無条件で厳禁とすることはしない。教壇にいる教師が気にならない程度であれば、これを放任する。要するに、授業に対する妨害と感じられないかぎりは、私語への注意はしない。

でも・・・以下は本音。ちょっとした私語でも、しばしば教壇にまで聞こえてきて、非常に気になる。ましてや、私語をする人たちの周辺ではかなりの迷惑行為であるといえる。その証拠に、私語を注意するとしばしば「よくぞ言ってくれた！」と受講生から感謝される。結局、授業中に長々と私語を続ける人とは、まわりの迷惑など考えていない人である、といえるだろう。周囲の迷惑を考えない人とは、社会のルールを気にしない人のことであるが、大学において教育に携わると者としては、このようなルールを何とも思わない欠陥を持つ人間を将来社会に送り出すことは大きな問題であるかもしれない。よって、気になる私語については、断固として対処する。

ただし、徹底した私語弾圧は、授業に静粛と同時に「恐怖政治」のような冷たさをも与えてしまい、そこでは柔軟性に富んだ活力のある授業の展開は望めなくなる。しらけるのである。だから、多くの教師は私語の注意に消極的であったりする。けれども、放置しているとますます私語が音量を増す場合も多く、対応せざるをえない。

●一般的傾向

いわゆる偏差値の低い大学ほど、授業中の私語は多く、大きく、それを停止させることが困難であるようだ。例えば、開始５分間は「静かにせよ」と教師が注意し続けることになるのだという。もっと低い大学では、一応「静かに」なっても、それは10分ももたないのだという。一方で、不気味に静粛な雰囲気のままの大学もある、ともいうが。

ともかく、学生たちは90分という時間、授業に集中することができないのであろう。乱暴な言い方をするならば、たびたび私語で注意されるような者は、大学で勉強をするという点について、あまり適していないのかもしれない。

●原則論

大学の授業が授業として成り立つためには、教師のメッセージが学生たちに伝わることが必要最低限の条件であろう。それが満たされないような状況では、教師と学生との関係は成立せず、大学としての存在意味も崩壊へと向かう。

学生にとって、ある授業が「くだらない」「つまらない」と思われるケースもあるかもしれない。けれども、あなたはつまらなくとも、別の人もつまらないとはかぎらない。あなたは、別の人が静粛に授業を受ける権利を侵害してはいけない。

「しょーもない」授業なのに、必須あるいは出席重視など、困った状況も多々あることは理解できる。しかし、私語をせずに時間を有効活用する手だてはいくらでもあるはずである。多くの場合、教師は授業中の居眠りや「内職」を糾弾しない。頭を使ってほしい。

また、一見「どうしようもない」と思われる授業であっても、あえて教師はそれを学生に伝えようとしているのだ。なぜそうなのか、少しは考えてみてもいいかもしれない。

●最も気になること

私語を中止させられた学生は、しばしば「この教師は私語にうるさいので気をつけよう」と考える。彼らには、大学の授業全体において、限度を超えた私語が問題である、という発想が欠落している。このような考え方こそが最大の問題である。私語を注意しない教師がいるからといって、それは私語が許される授業である、ということにはならない。

（ある教師は、自分は学生を大人として扱っており、「だまれ」と注意はしないと言う）

「私語」の問題を、その場その場での相手との関係でのみ理解するのではなく、社会・組織・システムなどにかかわるルールの一つとしてとらえてほしいものである。

授業評価においては、特に私語について、この授業の対応がどうであったか、率直な意見を求めた。回答コメントは以下のとおりである。

私語がうるさい。もう少し何とかしてほしい	16
後ろはうるさい	1
私語は厳しく対処すべき	7

私語は概ね問題ない	44
私語について、あれこれ解説しすぎ	2
私語や居眠りの背景には授業の興味深さ（のなさ）が関係している	2
教室が広すぎる	1

私語へのコメントからは、それなりの対応はできたと判断したいが、大教室の後方においては、依然として「うるさい」状況が残っていたことがわかる。気になったのは、授業評価①の「授業で評価できる点」の回答の番号18、「このような大教室で静かな授業は珍しい」というものである。こうコメントした２名の受講生の内の一人は（他学部で開講されている）「西洋○○史」は「無法地帯」と化している、と記述している。また、今回の授業だけでなく、個人的に、また他の教員からも耳にする現象として、私語を注意した際の感想コメントに「よくぞ注意してくれた。感謝」といった類の「お礼」が書かれることがしばしばある。私語への注意に対し、受講生が礼を言わねばならない状況とは、やはり異常であると言うべきだろう。

以上のような状況に対して、個々の教員の意識の向上が重要であることは言うまでもないが、そもそも大学として、とりわけ新入生への徹底した指導が必要であるのかもしれない[(6)]。

７．おわりに

本稿は、たった一度の授業実践からのデータをごく簡単に分析したものにすぎない。したがって、結論はあくまでも推測の域を出るものではない。ただそれでも、試験の結果からは、いくつかの課題が明確に示されているように思われる。

一つは、大教室での一斉授業の問題である。これは私語の問題とも深く関わっている。200名を超える受講者に対し、ある一定の学習内容についての習得を等しく期待するのは、やはり限度があるようだ。ただし、このような実態を受けて、授業者の方で今後直ちに実施すべき対応策が見あたらないのも事実である。

より具体的なレベルでの問題となると、高校世界史の再履修ないし復習が急務であろう。高校での学習が不十分であると自覚している受講者に、その関心に応じた対応としての学習課題を課し、授業を進める必要性を痛感した。その一方で、高校世界史Ｂの内容を踏まえつつ、より高度な（教科書の内容をより深く学習する）授業を求めている学生への対応も不可避である。これら２つの方向を異にする必要性を、一つの授業の中で両立させるのはかなり困難に思えてならない。このような傾向が、ひとつ西洋史学に特殊なものなのか、高校での学習内容全般に広く当てはまる問題であるのか、一層の分析が求められる。

本稿では、細かな成績についての傾向分析などについて論じることはできなかった。より受講生のニーズにかなった授業ができるよう、今後とも問題意識を持ち続け、より質の高い授業内容を心がけたい。

注

(1) 高校世界史Ｂを受講していない可能性のある者への入門授業としては、文学部は「西洋史学入門」（春学期）を１年生向けに開講している。また、より幅広いテーマでの西洋史学の授業についても、文学部以外の各学部を対象として毎年開講している（ただし、受講条件は概ね２年生以上）。

(2) 2006年８月の刊行。最新の研究を踏まえた概説書であるとともに、本書は同社の定評ある概説書『西洋の歴史［古代・中世編］』（1988年刊行）を継承するものであり、入門書としても信頼のおける書籍であるといえる。

(3) 双方向的な授業実践については、阿部和厚他「北海道大学 FD マニュアル」『高等教育ジャーナル―高等教育と生涯学習―』７号2000年 pp.29-125 および、同年11月17・18日に実施された「第３回北海道大学教育ワークショップ「インターアクティブな授業の開発」」への筆者の参加体験を元にしている。

(4) 授業評価での記述から、未履修者かそう推測できる者が10名いた。提出者数から考えて、その２～３倍が実際の該当者であると推測される。

(5)〈授業に関する調査〉のＡ４用紙形式は、①授業への出席状況、②授業への積極的な取り組み、③授業の学習目的の明確性、④担当者の話し方、⑤授業で求められる作業量（リポート、宿題、自習）の適切性、⑥授業の内容理解に向けての工夫、⑦担当者の熱意、⑧新たな知見（技能）の獲得、⑨授業への満足度、の項目について、５段階で答えるもの。

(6) 大学では、バイク通学や路上喫煙については、大がかりなマナーキャンペーンを展開しているが、そもそもマナーとしては、私語の方がより重要度が高いような印象を受ける。

付録

〈試験問題〉

（問１）以下の文において、誤りを含むものを一つ選べ。〈以下10問は各５点〉
①紀元前1200年頃、ミュケナイ文明は終焉を迎えた。
②紀元前８世紀頃、ポリスが誕生するが、それは植民時代の開幕と時を同じくしていた。
③アテナイは、ギリシアの諸ポリスの中で、特に大規模なポリスというわけではない。
④紀元前６世紀のアテナイを、僭主として一定期間支配したのがペイシストラトスである。

（問２）以下の文において、誤りを含むものはどれか。一つ選べ。
①ギリシア人（ヘレネス）はペルシア戦争に勝利した頃から、異邦人（バルバロイ）を野蛮人として蔑視するようになった。
②紀元前５世紀頃、ギリシア人たちは小アジアの西岸地域でも大いに活躍していた。
③アテナイのポリスとしての発展と、そこでの民主政の発展とは連動していた。
④スパルタはデロス同盟に加盟していた。

（問３）ヘレニズム時代に栄えた都市でないものはどれか。
①アレクサンドリア
②アンティオキア
③エフェソス
④アテナイ
⑤コンスタンティノープル

（問４）共和政ローマの発展に関連する事項を時代順に並べよ（例①→②→③→④→⑤）。
①アクティウムの戦い
②アンティゴノス朝マケドニア王国の滅亡
③第二次ポエニ戦争
④シチリアの属州化
⑤イタリア半島（北部は除く）の統一

（問５）帝政ローマ時代に起こった出来事でないものはどれか。
①ローマの支配領域の最大化
②アントニヌス勅令
③キリスト教の迫害
④カエサル暗殺
⑤「３世紀の危機」

（問６）キリスト教が発展する過程で登場した以下の５名のローマ皇帝を時代順に並べよ。
①ネロ
②ディオクレティアヌス
③コンスタンティヌス
④テオドシウス１世
⑤ユスティニアヌス１世

（問７）次の文の中から、下線部が誤っている箇所を１つ選べ。
①カロリング王家の血統が途絶えた後、②東フランク王国では各地の部族より大公たちが台頭したが、ドイツ国王となったザクセン大公家の③オットー１世は、レヒフェルトの戦いで④アヴァール人を打ち破り、962年に⑤ローマで教皇から皇帝に戴冠された。

（問８）教皇グレゴリウス７世が推し進めた教会刷新の改革の内容を１つ以上あげなさい。

（問９）12世紀前後の西ヨーロッパに起こっていた事項として、誤っているのはどれか。
①人口増加と耕作地拡大
②英仏百年戦争の勃発
③聖地を目指した十字軍運動
④英王ジョンのマグナ・カルタ承認
⑤イベリア半島でのレコンキスタ

（問10）以下の文において、誤りを含むものを一つ選べ。
①中世に、ポーランド、チェコ、ハンガリーの地域に移住したのは主にドイツ人である。
②ポーランドやチェコの住民の多数はスラヴ系であった。
③ドイツ騎士修道会は主にバルト海沿岸地域に勢力を拡大させた。
④建国以来、ロシアではカトリックのキリスト教が信仰された。

（問11）次の用語の中から３つを選び、簡潔に（３行以内で）説明せよ。〈各10点〉
A．古代ローマ元首政
B．「ピレンヌ・テーゼ」
C．「暗黒時代」
D．ディアドコイ
E．「ピピンの寄進」　F．「カノッサの屈辱」

（問12）次のα、β、γ、δの各文章に10～20字程度のタイトルを付けよ。〈各５点〉
（本文は省略する）

■西洋史学概説（第４回）「ギリシア・ポリス世界の繁栄」pp. 24-37.

＜アテナイを中心としたポリス世界の展開＞

●０）賢人ソロン(前640頃-560頃)の調停～「アテナイ民主政の父」

・貴族キュロン（オリンピック優勝２回）のアクロポリス占拠し僭主めざす× 632/628？
　→アルクメオン家メガクレス（海岸党）率いる民衆の抵抗とキュロン処刑

・調停者ソロンの登場：詩人，アルコン，富裕でないも名門，後に諸国を漫遊　前594年

（１）「重荷おろし」：農民の負債の廃棄

（２）身体を抵当とした借金の禁止→農民の隷属民・債務奴隷化を防止

（３）四百人評議会の設置→民会のための予備的審議を担当

（４）裁判の陪審員に全市民が参加できるとする原則

（５）財産級（金権政治）：「五百石級」「騎士」「農民」「労務者」の４級
　　→アルコン，財務官など役職就任を等級により制限する

→「ポリスは自由民よりなるべし」の理念＝市民団の一体性の保証～民会

●１）僭主政

・アルクメオン家など，アテナイの貴族家門相互による党派対立と政治混乱

・ペイシストラトス：「山地党」を率い非合法に政治の実権を握る＝僭主　前560/1年
　　穏健政治，既存制度の維持，大衆の支持→政治的安定→死去(528/7)

・息子ヒッピアス：兄弟のヒッパルコスの暗殺後に暴君化→クレイステネス追放
　　スパルタ軍とアテナイ市民の民主派の蜂起→ペルシアへ亡命　前510年

・貴族のクレイステネスはライバルのイサゴラスに対抗して民主的改革に着手

●１）クレイステネスの改革　前508年

・部族制の改編（中心的改革）
　従来の４部族→10部族へ；構成要素＝区（デーモス：既存の村落，計139）
　　海岸・市域・内陸の３地域に各10トリッテュス→合計30→１つ以上の「区」
　→市民団の再編成～アテナイの政治・軍事などの枠組となる：本籍地の決定

・五百人評議会の設置→従来の四百人会に代わる；各部族より50名ずつ；区単位
　→民会の予備審議とともに日々の政務にも重要な役割→民主政の中心のひとつ
＋前501年，将軍（ストラテーゴス）も部族ごとに10名選出

・陶片追放（オスタラキスモス：英語Ostracism）←アリストテレスの情報より
　５世紀のみに十数例が確認される～年に一度，6000票で10年間の国外追放へ

●２）ペルシア戦争　前490年

・小アジアのイオニア諸都市のペルシアへの反乱と鎮圧：前499～494年

・第１次：490年＝ダレイオス１世下(552-486)，マラトン←ヒッピアスが先導役
　→ペルシア軍に対するギリシア諸ポリスの対応はイロイロ
　※「テミストクレスの決議」第１次遠征後，ラウレイオン鉱山の銀を元手に
　　三段櫂船の建造を決議し，ペルシア軍の侵攻に
　　海軍を主軸に備えることに。決議碑文が残る。
　→海軍国アテナイの誕生へ

＜アテナイ：アルコンや他の国家の重要役職を，選挙から抽選方式とする＞　前487/6年

・第２次：480年＝クセルクセス1世下(486-465)親征，テルモピュライ～サラミス
　　479年＝武将マルドニオス→プラタイアイの戦い／ミュカレの海戦

・戦争の結果
　→ギリシア人独特の他者意識の確立：「ヘレネス」と「バルバロイ」
　→アテナイ海軍を支えた下層市民（漕ぎ手）の地位向上→民主政の徹底化へ

・ペルシア帝国のプレゼンス：武力行使はなくなるも，戦争後も常に影響力行使

●３）デロス同盟　前478/7年

・ペルシアの再度の侵攻に備えるための攻守同盟：軍船か同盟貢租を拠出
　→アテナイが同盟軍を指揮，各国に平等の発言権～デロス島に同盟金庫を

・前466年，エーゲ海周辺よりペルシア勢力を一掃；同盟国数は最盛期に200へ

（ペリクレス時代：前490年頃生～前443年政権掌握～死去429年）

・前454年，金庫の移動→アテナイによる海上帝国と変貌（後パルテノン建設へ）
　→同盟国の内政への干渉；パンアテナイア祭への参加強制と貢ぎ物
　→アテナイ人の市民権を保有したままの植民地（アポイキア）建設

・前449年，アテナイ人カリアスによる和平：正式な終戦協定～同盟の存在価値？

●４）ペリクレスとアテナイ民主政の完成（個人史→プルタルコス『対比列伝』）

・前462年，民主派エフィアルテスの改革：五百人評議会・民会・裁判所の重視へ
　＝元アルコン就任者・貴族たちの牙城，アレイオスパゴス評議会の権限制限

・急進派の後継者ペリクレスは貴族派の指導者キモンの排除に成功：陶片追放　前461年
　→民会出席者・各種役人・陪審者に手当を支給する→市民の政治参加容易に

・前451/0年，アテナイ市民権法～両親ともにアテナイ市民

・前443年，この年以後，毎年将軍に選出される＝事実上の一人支配体制　前443年
　→アテナイ市民文化の黄金時代の現出とギリシア諸ポリスへの帝国的支配

●５）ペロポネソス戦争

・開始：アテナイとデロス同盟 vs スパルタとペロポネソス同盟の戦争勃発　前431年
　～全ギリシアの覇権をかけての長期戦争へ：各ポリス内部での党派争いも

・前430年，アテナイで疫病の流行：ペリクレスも死去～民衆政治は迷走へ

・前421年，アテナイ穏健民主派ニキアスによる一時的和平

・前415年，アテナイ主戦派アルキビアデスによるシチリア遠征の開始

・前411年，アテナイで寡頭派による政権奪取＝「四百人政権」～翌年崩壊

・戦争終結：アテナイで再度寡頭派クーデター；降伏；翌年民主政へ　前404年

●６）前４世紀のギリシア世界

・民主政アテナイの再建と商工業国としての繁栄→「第２海上帝国」の建設へ

・スパルタの覇権と短期間での崩壊＝コリントス戦争（前395～386年）
　～テーバイ，アテナイ，コリントスなどの挑戦
　→アンタルキダス条約＝「大王の和約」：ペルシア戦争以前の体制への回帰

・テーバイの優位：エパメイノンダスのレウクトラの戦いでの勝利　前371年
　→スパルタの支配下のヘイロタイの土地メッセニアの解放→スパルタの衰退
　→エパメイノンダスの戦死（前362年）とテーバイの衰退

・アテナイ第２海上同盟→反発から同盟市戦争（前357～355年）
　→諸国が入り乱れての覇権抗争とその結果としての不安定さの継続
　→マケドニアのフィリッポス２世の全ギリシアへの覇権確立
　　＝カイロネイアの戦い　前338年

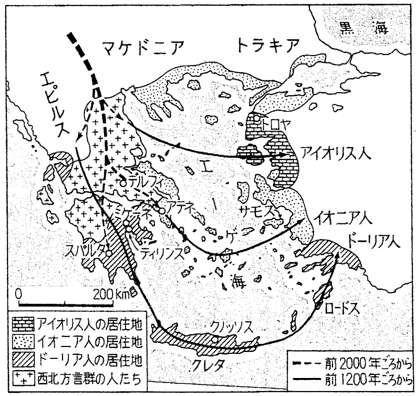
（参考文献）
・橋場弦『丘の上の民主政』（東京大学出版会，1997年）：本節執筆者による名著
・M・I・フィンレイ著『民主主義』（講談社学術文庫，2007年）¥960-：文庫本あり
　→かつての古代史研究の最高権威による著作
・ヘロドトス『歴史』（松平千秋訳，1971年）：はまると，抜群に面白い
・トゥーキュディデース『歴史』（久保正彰訳，1966年）：かなりマニアック
　→岩波文庫版（『戦史』）があるが，京都大学「西洋古典叢書」シリーズに新訳あり

■先週に提出された質問などをめぐって
①質問用紙の書き方について
　原則は次回分の予習を踏まえての質問や要望である。名前と感想だけでは意味はない。
　ただし，当日の授業内容について質問をしてもよい。教科書の内容と重複しないこと。
②エーゲ文明・文化での時期（初期や中期）の区別はどのようにして？
③線文字A（主にクレタのもの）とB（ミュケーナイのもの）の関係
④陸路について：地中海交易は主に船舶による。ギリシアは地形が複雑で陸路は発展少。
⑤「ホメーロスは私でも読めますか？」
⑥「ポリスは家庭を意味するオイコスをギリシャのアジア的専制の最小単位と考えたそうですが，どうして？」→？？？
⑦マラトン会戦でのアテナイの勝因
⑧アテナイ民主政の民会など形式にすぎないのか？
⑨アテナイ政治のトップ，アルコンの起源
⑩ペリクレスは「15年にわたって連年将軍に選出され・・・」
　→将軍：定員10人は「例外的に再任・重任が可能で任期に制限がなかった」
⑪国家の役人などは，抽選で大丈夫なのか？
⑫重装歩兵の誕生について
⑬スパルタのヘイロータイについて→教科書20頁に詳しく書かれています。
⑭テルモピュライ：前480年の有名な合戦。テッサリアにある隘路（あいろ）Thermopylai をスパルタ王レオニダス下の少数のギリシア軍が守備。３日間の死闘。
⑮ローマとの対比をしてほしい
⑯スパルタの市民の人口は？
⑰スパルタでの従属民との常に「戦闘態勢の維持」とはどういうこと？（前回に話した）
⑱テミストクレスのペルシアへの亡命の理由は？
⑲商業国家としてのアテナイの発展のプロセスを具体的に
⑳コリントス戦争：もちろんギリシア各地で陸戦・海戦が展開されています。
21：オリンピック開催時は原則的に休戦する。
22：ギリシアの神々への信仰の始まりは不明。文字が登場する時期にはすでに存在した。
23：どうしてクレイステネスの新部族制の導入で貴族政が崩れるのか？
24：ペルシア側につくギリシアのポリスがあるのはどうして？
25：正確な年代はどうしてわかるのか？
26：古代ギリシアの文化について話してほしい。授業では扱わず。→第３節に詳しい

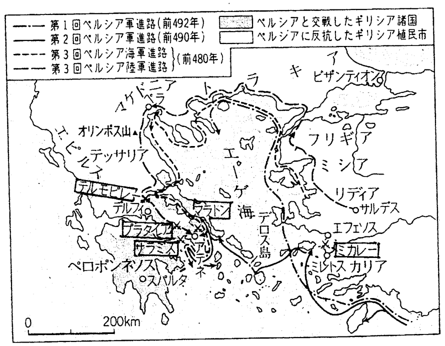
●復習の方法→配布プリントも参考にしつつ，教科書を読み直すのが基本。ノート作成。
●多くの固有名詞への対処法。高校世界史の知識がないと辛い。ストーリーとともに。
●教育実習の期間→自分で教科書をもとに対処するしかないです。プリントは請求を。
●早口で困る；地図がわかりにくい。

【アテナイのアルクメオン家系関係図】

メガクレス（アルコン就任）→ × ←僭主をめざすキュロン・・・処刑される
｜　　その後に追放
｜
アルクメオン　クレイステネス（付近のポリスであるシキュオン僭主）
｜　　　　　　｜
メガクレス＝＝アガリステ　→×←★僭主ペイシストラトス
（海岸党）　｜　　　　　　（山地党）→追放後和解，娘がメガクレス後妻に
｜―――――――――――――――｜
★クレイステネス（民主的改革の実施）　　ヒッポクラテス
｜　　　　→×←イサゴラス　　　　　　　　｜
メガクレス　　　　　　　　　　メガクレス（陶片追放される）
｜　　　　　　　　　　　　　　｜
娘　　　　　　　　　　　　　　娘
｜　　　　　　　　　　　　　　｜
息子　　　　　　　　　　　　　★ペリクレス
｜　　　　　　　　　　　　　　↓
アルキビアデス（将軍，シチリア遠征）←←← 後見人
↓
才能あふれる美男子でソクラテスが愛す。過激民主派指導者。
シチリア遠征を提案。遠征軍から召還されるもスパルタへ逃亡し，さらにペルシアへ。
後にアテナイを支援して407年に凱旋，その後戦闘敗北のために出国，小アジアで暗殺。



ギリシア人の南下と定住



ペルシア戦争要図

（出典：山川出版社の高校世界史の教科書より）